

永正九年八月四日 (1512 年 9 月 13 日)
徳島県穴喰浦を襲った大津波の発生原因

What was the cause of the gigantic tsunami attacked Shishikui port town,
Tokushima Prefecture, Shikoku, on 13th September, 1512 ?

都司 嘉宣¹
Yoshinobu TSUJI¹

Abstract

According to the ancient document “The Memorandum written by Priest Yuukei, the founder of Endoji Temple, in Shishikui Town” a large tsunami struck Shishikui Town, Tokushima Prefecture, Shikoku, on September 13, 1512 in Julian calendar. Due to this tsunami, 2,200 people were drowned, and only 1,500 people were survived in this port town. However, no earthquake shakings were recorded. Even at Kyoto, the capital of Japan at this era, no perceptible earthquakes were recorded on this day in diaries kept by several noblemen. For this reason, it is considered that this tsunami was not caused by a gigantic earthquake of the series of the Nankai Trough earthquakes. This tsunami is also recorded as a historical tsunami in documents written just after the 1707 Hiei earthquake that occurred 195 years later, and so we can confirm its actual occurrence. This tsunami is considered to be a distant tsunami caused by a large earthquake in the continental shelf area west of the South American continent.

“The Pacific Tsunami Catalog” compiled by Soloviev and Go (1976) includes the following Peruvian Indian folklores. In this biography, Silgado (1968) wrote, “A long time ago, between 1513 and 1515, there was a powerful earthquake

so strong that it caused high mountains to be collapsed, and the ocean level has shown marked fluctuation.

The tsunami that struck Shishikui Town in 1512 is presumed to be a distant tsunami caused by the great earthquake handed down in a South American legend.

1. はじめに

徳島県の太平洋海岸の高知県境に近い位置に、海陽町穴喰（ししくい）という漁港町がある。ここは南海トラフのプレート境界線が沖合を走る海域に面している。このために、中世・近世に起きた一連の南海沖の巨大地震が発生するたびごとに、それらに伴う大きな津波の被害を受けてきた（図 1）。たとえば、宝永 4 年（1707）の宝永地震（M8.6, 宇佐美ら, 2013）の津波のさいには、「穴喰浦にては、死人十一人、家一軒なく流失し」

（軼奥記録、『新収 日本地震史料 第三巻 別巻』の p490）、と記録されている。また、安政元年十一月五日の安政南海地震（M8.4, 図 1 の 1854-B）の津波の際には、穴喰では家屋の被害として「総家数 271 軒のうち 141 軒流失, 35 軒壊, 80 軒汐入」と記され、また人的被害として、「総人数 1,055 人のうち、流死人 8 人」と記されている（「安政の震潮記」, 『新収 日本地震史料 第五巻別巻 5-2, p1874）。

¹地震津波防災戦略研究所

¹Earthquake and Tsunami Disaster Prevention Strategy Institute

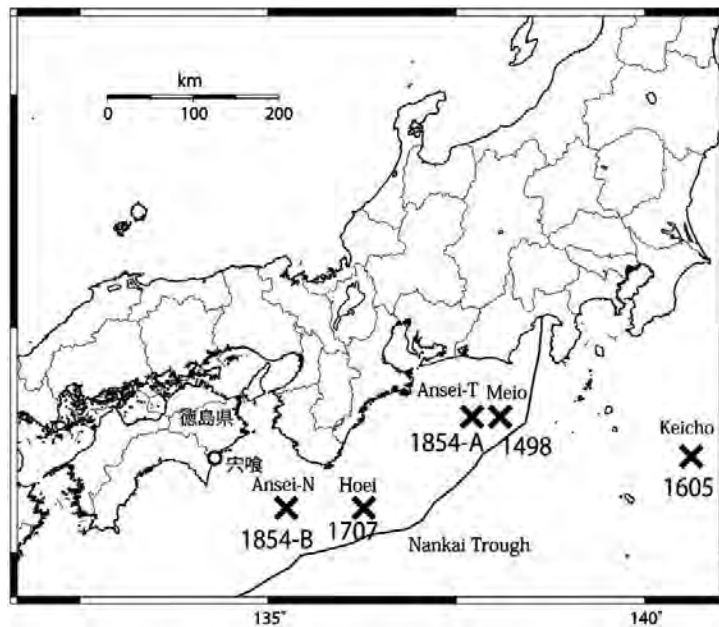


図1 徳島県海陽町穴喰（ししくい）と、中世・近世にここをおそった地震津波の震源位置（×印） 1498 年は「明応東海地震」、1605 年は『慶長地震』

2. 穴喰を襲った永正九年八月四日(1512 年 9 月 13 日)の津波

大前節で述べたように、穴喰は近世以降、数回の南海トラフ沿いの海域でプレート境界型巨大地震による津波の被害を受けてきたが、ここに、永正九年八月四日（ユリウス暦 1512 年 9 月 13 日、グレゴリオ暦では同月 23 日）にも津波の被災があったと伝える古文書記録がある。すなわち、「円頓寺（えんどじ）開山住持宥慶之旧記」という記録が伝えられていて、宇佐美（1998）の地震史料集の p11 に掲載されている。

冒頭に「当浦成来旧記書之写、永正十一年（1514）正月に書記すとこれあり候」と記されていることから、大津波に襲われた永正九年八月から約一年半後に原記録から転写されたものと判断される。この原記録には、「永正九年八月」とあるだけで、日付はこれだけでは判明しないが、穴喰の旧家、田井家文書「田井家文書一」に「永正九年八月四日、慶長九年十二月十六日、宝永四年十月四日、嘉

永七寅十一月五日四ケ度之震潮記 穴喰浦成来旧記之写」と記載されていることから、いちおう日付は八月四日と推定しておく。ただし、この日付の記載が、永正十二年（1512）から 342 年を経た後の嘉永七年（1854）の記録で初めて判明していることには留意すべきである。

以下、この文献の本文の記載内容を節ごとに区切って、ここに掲げて行こう。

- A. 一、当浦之儀、永正九年八月の洪浪入り候て、惣所分残らず流失いたし申す也。
- B. 其の節、所々城山へにけ上る者数十人也。
- C. 南の橋より向の町分も残らず流失
- D. 然れども此の所は山近ゆえ多くの人死もこれなく候

以上の A. ～ D. の各項目を、図 2 に示した現代地図と図 3 に示した明治 40 年(1907) 測量の地図を参考にしながら解釈していこう。現在の穴喰の居住地は、その南側を流れる中規模河川である「穴喰川」の北側の平野部にのみ市街地が発達しているが、永正九年の津波以前には、この川の南側の平野部にも市街

地があった。宍喰川には土佐に通ずる街道（土佐街道）の橋が架かっており、この橋は上述の文書では「南の橋」と呼ばれている。以下、A～Dの各項目を解説していこう。

- A. この宍喰浦は、永正九年八月に「洪浪」が入って、「惣所分」が残らず流失したと言われている。

解説：「惣所（そうしょ）」とは、中世以来発生した自治体の村組織で、複数の村の集合体からなっていた。宍喰の場合、宍喰川の北側の市街地と、南側の市街とを併せ、さらに周辺の小集落を併せて「惣所」と呼んだと考えられる。これらの市街地が残らず流失したというのである。なお、「津波、ツナミ」という語が日本全体で一般化したのは、慶長十六年（1611）の三陸地震以後のことである。したがって、ここの本文に「洪浪」とあって、「津波」と記していないのは、永正九年（1512）当時の古文書表記として正確であることを反映している。

- B. 北分の町の南西隅には、標高3mほどの市街地の背後に標高が20mほど高い「城山」

があるが、この津波の時、数十人がここに登って助かった。

解説：「北分」とは、宍喰川の北岸平野の市街地をいう。「城山」は現在の宍喰駅のすぐ南東にある。標高20m余りの小丘である。図3の明治地図には明瞭に表記されている。

- C. 宍喰川にかかる土佐街道の橋の南側に広がっていた「向こうの町分」（南分、南町）も残らず流失した。

解説：現在の地図（図2）、および明治の地図（図3）では、橋の南の町分に相当するところは、河川敷、および水田地になっていて、家屋は全く存在しない。南町の標高は2mほどで、北町より1mほど低いことに注意しておこう。

- D. （南分の町の全部が流失し、北町の大部分も津波の被害にあったが）しかしながら、「此の所」は、山が近かったので、多くの人が死ぬということにはなかった。

解説：この文で「此の所」とは、この文の語り手にとっては自明の場所であっても、



図2 宍喰市街地の現代地図。永正九年（1512）の津波以前には、宍喰川の南側平野部にも「南町」として市街地が広がっていたと推定される。

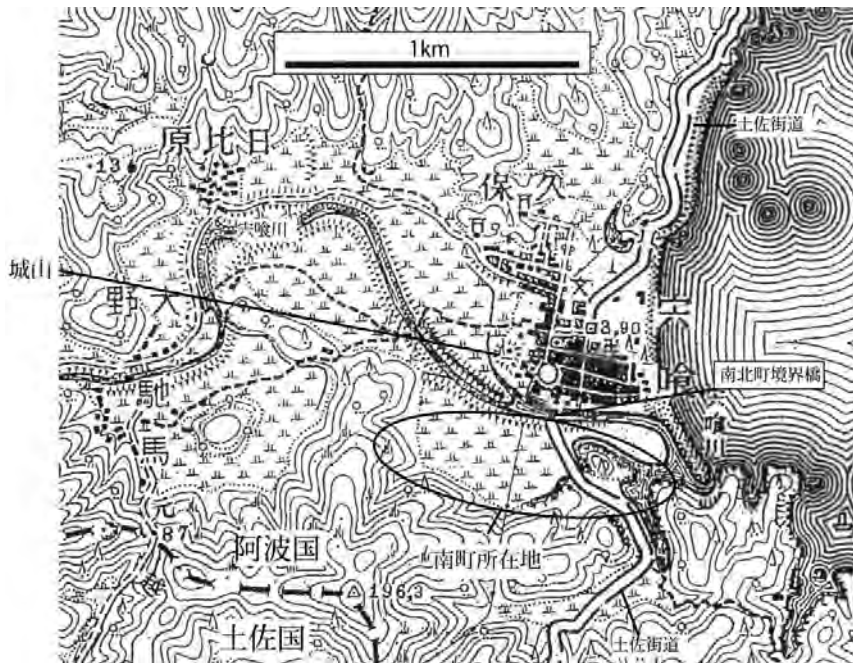


図3 明治40年測図・五万分の一地図〔甲浦〕に描かれた突喰

この文を読む我々にとっては、自明ではない。「山が近かったので、多くの人が死ぬということとはなかった」というのであるから、この文の筆者は、北町のさらに北寄りの、図2の郵便局付近の市街地に住んでいた人であろうと推定される。たしかに、ここからだと北西方向に200～300m移動すれば山地に到達する。

原文書のD. 項に引き続き部分を読んで行こう。

- E. 橋より北分の町は町家は多くいたみもこれなく候へども死人多くこれあり候
- F. 凡そ其の節、両町の人老若男女とも三千七百余入、相助かりし人、一千五百余人也。
- G. 其の頃、橋より向の町屋、一軒も残らず流失、
- H. 其の上居屋敷土地悉く掘れ流れ一面の川に成り候て
- I. 其の後在所成り申さず・・・

以下、各項目の現代語訳文と解説を述べて

行こう。

- E. (土佐街道の) 橋より、北分（北側、北町）では町家は多くの破損は起きなかったが、人の死は多く生じた。

解説：突喰川にかかる土佐街道の橋（図2、および図3参照）より北側の街区、すなわち突喰川の北側に広がる街区（北分、あるいは北町）では、津波による家屋の大きな損傷は起きなかったが、人は多く死んだ、というのである。現代の地図によると、突喰川の北側の市街地の街路の標高は、おおむね3m前後であるのに対して、南側の平地（現在は大部分水田になっている）の標高は2m前後である。この1mの市街地の標高差が家屋に対する津波の被害程度に大きな差となって表れたと考えられる（後に詳述）「其の後在所成り申さず」と続く。橋の南側の市街地（南町）は現在に至るまで復興されることはなかった。

羽鳥（1984）によると、現代の津波被害例にもとづく議論であるが、津波の地上冠水厚さが1.0m以下の場合には、家屋はほ

とんど破壊・流失せず、2.0m を超えると全壊・流失家屋は発生するとされる。このデータを参照すると、津波の平均海面上の高さは、宍喰では $H=4.0\text{m}$ ほどであったと推定される (33.5648°N , 134.3050°E , 信頼度 B)。

北町では、家屋の破壊はほとんど生じなかったが、人命は多く失われた。これは、地上冠水厚さは 1.0m 程度ではあっても、流速が速かったからであろうと推定される。つづいて次項では、当時の宍喰の人口と死者の概数が述べられている。

- F. この津波の時、宍喰の北分、および南分の両方の町には、3,700 人余りが住んでいたが、助かった人はこのうち 1,500 人余りであった。

解説：永正九年（1512）当時、宍喰の人口は 3,700 人余りであった。このうち 1,500 人余りが助かった、というのであるから、津波による犠牲者は約 2,200 人であったことになる。この原文に基づいて、明治期に編纂された「徴古雑抄続編」（武者，1941 の p483）には「南町之男女凡三千七百餘人死亡」と記されている。ここでは、津波当時の宍喰全体の人口が 3,700 人であると記された原文が、「死者が 3,700 人」と誤読されていることに厳重に注意したい。しかも、原文では「両町で」であるのに「徴古雑抄続編」では「南町では」とさらに誤記されている。読者は、決して「徴古雑抄続編」の文章を再引用して誤読結果をひろめることは厳重に避けていただきたい。

- G. この津波によって、橋の南の町屋、すなわち宍喰川以南の市街地（南分、あるいは南町）は一軒も残らず流失した。

解説：この津波当時、宍喰川を挟んで、北側の街路は「家屋の破壊はほとんど生じなかった」のに対して、南側の街路は「一軒も残らず流失した」というのである。宍喰川の北側と南側で、家屋の被害状況が対照的に大きく異なっていることに注意したい。当然、宍喰全体で生じた約 2,200 人の死者の大半は、壊滅的な被害を生じた宍喰川の

南側の市街地で生じたものと理解される。次の項目にこの南側の街路の特徴が記されている。

- H. (橋の南側の町屋が一軒の残らず流失したが) その上に「居屋敷」の立ち並んでいた土地は、すべて掘れて流失し一面の川になってしまった。

解説：この文の「居屋敷」は、「いやしき」と読み、商店の主人などが日常的に住む高級な居住地を意味する。当然宍喰川の南側の街路の家々の構造は、宍喰川の北側の一般的な住宅地よりも堅牢な家屋が建立ち並んでいたと想定される。しかるに、川の北側の一般的な家並みの街路では「多く痛みこれなく」と書かれ、堅牢な家屋の立ち並んでいたはずの川の南側の街路は「居屋敷土地悉く掘れ流れ一面の川に成り候て」と記されている。すなわち、川の南側の居住地は敷地ごと掘り崩され、住宅地であったところの一部は、川の流水面になってしまった、というのである。そのうえ、この荒廃した居住地は、これ以後市街地として復興されることはなかった。すなわち次の I. の文に見る通りである。

- I. 「其の後在所成り申さず」とあって、その土地は、川の流水面、あるいは水田と化して、二度と市街地は復興されることはなかった、というのである。

以上のような永正九年（1512）津波の被害状況の記載を頭に入れて、図 2、及び図 3 の地図を見ておこう。宍喰川の北側の街路は、現在も人の住む住宅が密集して住む街路が広がっている。これに対して、川の南側は、水田地となっていて、其の上居屋敷土地悉く掘れ流れ一面の川に成り候て現在も家屋はほとんどなく、「其の後在所成り申さず」の状態は、500 年余りを経過した現代までも継続しているのである。

3. 永正 12 年津波と、後世の地震津波との被害の比較

宍喰での津波死者約 2,200 人を、後世の津

波による突喰での死者数と比較しておこう。

慶長九年十二月十六日 (1605 年 2 月 3 日) の房総半島南方沖地震の津波 (図 1 参照) による突喰での死者数は、「一千五百余人」と記されている。

この慶長地震の発生時刻は、夜の亥の刻 (22 時) である。しかも震源が房総半島南方沖で、京都では無感地震であった。当然、阿波突喰でも揺れはさほど大きくなかったと推定される。これらの理由で、地震による揺れは感じられても津波の来襲を予測するものは一人もおらず、多くの住民の死者を出したのであろう。

宝永地震 (宝永四年十月四日, 1707 年 10 月 28 日) の突喰での津波死者については「死人十一人, 人家一軒もなく流失し」(「軼奥記録」(牟岐村歴史史料), 新収日本地震史料第三巻別巻の p410) と記されており, 家屋が全流失となっている割に, 死者数は 11 人と大変少なかった。その理由は, 宝永地震の発生時刻が「未の上刻」, すなわち 14 時ごろであって, 住民全員が起きていた白昼の出来事であった。しかも, 地震の揺れが, 現代の震度階の 5 から 6 程度の, 家屋の損壊を引き起こすような強い揺れであった。さらに宝永地震のわずか 4 年前の元禄十六年十月二十三日 (1703 年 12 月 31 日) には, 江戸を含む関東地方で元禄地震が起きており, これによる地震動と津波が高知まで伝わっている (都司, 1981)。このため, 「大きな地震の後には津波が来る」という常識が一般にひろく知れ渡っていたのであろう。このために, 宝永地震津波のさいには, 住民の大多数が高所へ避難したと推定される。このため突喰では過半数の家屋が津波で流失したという重大被害が生じた割には, 死者はわずか 11 人ととどめることができたのであろう。

安政元年十一月五日 (1854 年 12 月 24 日) の安政南海地震の津波の被害を「安政の震潮記」(田井家文書, 新収日本地震史料第 5 巻別巻 5-2 の p1880) によって見ておこう。この当時, 突喰の総家数は 271 軒, うち流失 141 軒, 潰家 15 軒, 潰同様 20 軒, 汐入 80 軒,

無事 11 軒の家屋被害を生じている。総人口は 1,055 人で流死人はわずか 5 人であった。安政南海地震の場合には, 発生時刻が「申の中刻」, すなわち 16 時ころであって, 白昼の出来事であった。その上, 安政南海地震が起きた安政元年 11 月 5 日の前日の 11 月 4 日の午前 9 時ころに, 東海沖を震源として安政東海地震 (M8.4) が発生しており, この地震による揺れも, かなり強い有感地震として, 突喰でも感じられていた (下記参照)。これによる津波の余波も四国の海岸で観察された。このようすを, 前述「安政の震潮記」に見ておこう。

J. 「四日朝に至り, (中略) 辰の下刻 (午前 9 時ごろ) 中ゆりの地震, 続ひて両度海面俄かにあぶきを生じ, あじ島を打ち越し, 川半迄込み入ること三度」と, 安政東海地震の揺れと小津波 (「あぶき」) が突喰で記録されている。この前日の経験によって, 大部分の人が地震の後には津波が来る, という教訓を得ていたのである。

以上突喰は, 四度の津波に遭遇しているが, 死者数は永正九年 (1512) が約 2,200 人, 慶長九年が約 1,500 人であったのに対して, 宝永七年が 11 人, 安政南海が 5 人ととどまるという, 大差を生じている。この差は, 永正, 慶長の津波がのさいには, 地震動が感知されなかったのに対して, 宝永と安政南海の津波の際には, 地震による強い揺れが感じられた上に, 「地震の後には津波が来る恐れがある」という知識によって, 多くの人が地震直後にいち早く高所へ避難した成果が表れたものと考えられる。

4. 宝永四年 (1707) 津波記事中に言及された永正九年 (1512) 津波の記事

突喰では宝永四年 (1707) 十月四日の宝永地震の際にも津波による大きな被害を生じているが, その状況を述べる記事中に, 宝永津波と比較して永正九年 (1512) の津波, および慶長九年 (1605) の津波に言及するものがある。武者 (1941-b) の p206 に引用された「突

喰浦旧記」の次の記事である。

〔宍喰浦旧記〕

永正九年（1512）の大汐には、愛宕山に城有。戸井門に大手門有。是閉ける故、城内山へ入事ならず。死人多く有之由。

慶長（九年、1605）汐は入候事に諸人心不付、立騒候事遅く、溺死人多く有之事。

宝永汐（1707）には諸人心得速（すみやか）に逃げ候故、流死人無数よし云伝

（現代語訳）

永正九年（1512）の津波の時には、愛宕山の上に城があったが、この城の入りの戸井門も大手門も閉められていたため、城のある山へ避難することができず、死んだ人が多く出た。この文にいう「愛宕山」とは、図2、図3の「城山」と書かれた小丘である。

慶長九年（1605）の津波の時には、（地震が強くなかったため）津波が来ることにみんな気づかず（「心不付」、こころづかず）、避難が遅れたため溺死人が多く出た。宝永地震（1707）の時にはみんな大急ぎで逃げたため、流死人は多くなくて（「無数」、かずなし）済んだ。

宍喰で生じた3回の大津波の避難行動にもなって生じた出来事の相互の避難行動の差は防災上の教訓として興味深いものがある。

5. 1512年ころの宍喰の人口が3,700人とは、常識的に考えて多すぎないか？

上述のように、「円頓寺開山住持宍喰之旧記」には永正九年（1512）の津波来襲時の宍喰の人口が3,700人と記されている。

上述の「安政の震潮記」によると、安政元年（1854）の安政南海地震津波の来襲時には、宍喰の人口は1,055人と記されている。しかるにこれを342年さかのぼる永正九年（1512）に宍喰の人口が3,700人という、安政元年ころの4倍近い人口があった、と記されている。これは常識的に考えて、人口が多すぎないか？

本稿の筆者は、これに対する明白な回答は用意できないが、永正九年津波（1512）によっ

て2,200人が失われた上宍喰川の南の繁栄した街区が失われた上復興されなかった。その上、さらに慶長9年津波（1605）によって、1,500人が失われて、幕末の安政元年（1854）に至るまで、人口が回復しなかったのだ、ということ、何とか説明できないであろうか？

6. 宍喰を襲った永正九年（1512）津波の発生原因は何だったのだろうか？

6.1 京都でこの日、有感地震は記録されたか？

宍喰で約2,200人もの津波死者を出したという、この津波の発生原因は何だろうか？

津波の有様を詳細に伝える「円頓寺（えんどじ）開山住持宍喰之旧記」には、津波来襲の前に地震の揺れがあった、とはいっさい記録されてはいない。

もしこれが、南海トラフのプレート境界の滑りによる巨大地震であったとすれば、宍喰はもとより、そこから北東方向約200kmに位置する、当時の日本の首都であった京都で少なくとも有感地震が記録されているはずである。ちなみに、宝永地震（1707）の際にも、安政南海地震（1854-B）のさいにも、京都では震度4から5であった（宇佐美ら、2013）。この津波の発生原因が、プレート境界型の南海沖の巨大地震であったなら、京都で建物に多少の被害を生ずる程度の強い有感地震があったはずなのである。

さらに、京都ではその後数年の間、余震として有感地震の多い時期が引き続いて継続していたはずである（都司、2025-a）。

そこで、主として武者（1941-a）の史料集によって、永正九年（1512）の京都における有感地震の記録を調べてみよう。

永正九年の京都での有感地震

永正九年一月七日 地大震

（続本朝通鑑）

永正九年二月八日 地大震十度

（続本朝通鑑）

永正九年六月九日 夜地震七度

（実隆公記、尚通公記、拾芥記）

永正九年六月十日 夜地震
(尚通公記)
永正九年六月十三日 地震度々
(尚通公記)
永正九年六月二十九日 地動太
(尚通公記)
(永正九年八月四日前後は有感地震記録なし)。

以上のように、京都では三条実隆、近衛尚通などの貴族が有感地震を感じるごとに克明にその記録を残した日記が書き続けられている。しかるに、永正九年八月四日前後に、京都で有感地震があったという記録はない。

以上の事実によって、突喰に大津波をもたらしたのは、プレート間の滑りによる南海沖の巨大地震ではなかったことが判明する。

6.2 永正九年(1512)に突喰を襲った津波の原因は、暴風雨による高潮なのだろうか？

前項の考察によって、この津波が、南海沖に発生したプレート間巨大地震によるものではないことが判明した。それでは、この津波は暴風雨による高潮なのであろうか？

この津波を記録した津波の有様を詳細に伝える「円頓寺(えんどじ)開山住持宥慶之旧記」には、津波が来襲した日は暴風雨であったとは全く記されていない。

さらに、中央气象台・海洋气象台(1976)の『日本の気象史料 1』によれば、永正9年(1512)前後に日本列島に起きた暴風は次のようである。

永正七年九月二十九日(1510年10月31日)

奈良・東風大雨(「多門院日記」)

永正八年八月十九日(1511年9月11日)

九州・京都・奥羽諸国 大風雨

(実隆公記、妙法寺記など)

永正九年三月 相模国 大風 (続本朝通鑑)

永正十二年九月 紀伊国 大風 (熊野年代記)

以上のように、この年代の暴風雨は記録されているが、永正九年八月に暴風雨があった

という記録はなく、また前項で述べた京都で有感地震を記録した貴族の日記にも、この日とその前後の時期に暴風雨があったという記録はない。以上によって永正九年(1512)八月に突喰に大きな津波をもたらした原因は、暴風による高潮である、という見解も否定されるのである。

7. 永正九年(1512)の突喰津波は南米西海岸で生じた地震による遠地津波と推定される

永正九年(1512)に突喰を襲った津波の発生原因が、南海トラフのプレート境界の滑りで起きた地震によるものでも、暴風などの気象的な原因でもないとする、考えられるのは、南北米大陸の西海岸で発生した大きな地震が原因となって発生した津波が日本列島に伝わってきた遠地津波ではなかったかと推測される。

南米大陸西岸に発生した津波が遠地津波となって日本列島を来襲した例として、真っ先に挙げられるのは昭和35年(1960)5月22日のチリ津波であろう。この津波によって、沖縄を含む日本列島では合計142人の死者を生じた。渡辺(1998)によると、この津波の時、気仙沼で5.5m、陸前高田市脇ノ浜で6.1m、宮古市津軽石で5.8mの浸水高さ(TP基準)を記録した。

筆者(都司, 2025-b)は、近世(天正14年(1586)から明治10年(1878)まで)、南北米大陸の西海岸付近の海域で生じた地震による津波が日本列島に到達した例は8例あったとし、個々の津波について、日本側で記録された古文書と記載内容を論じたうえで、記録された各点での津波の浸水高さを推定した。宝暦元年(1751)のチリの遠地津波では宮古市津軽石で浸水高4.2mに達している。また明治元年(1868)の津波では八戸で4.7mの高さにまで浸水している。

図4は、日本で遠地津波として記録された、米大陸西海岸に発生した地震の震源位置である。8例のうち7例までが南米のペルー、お

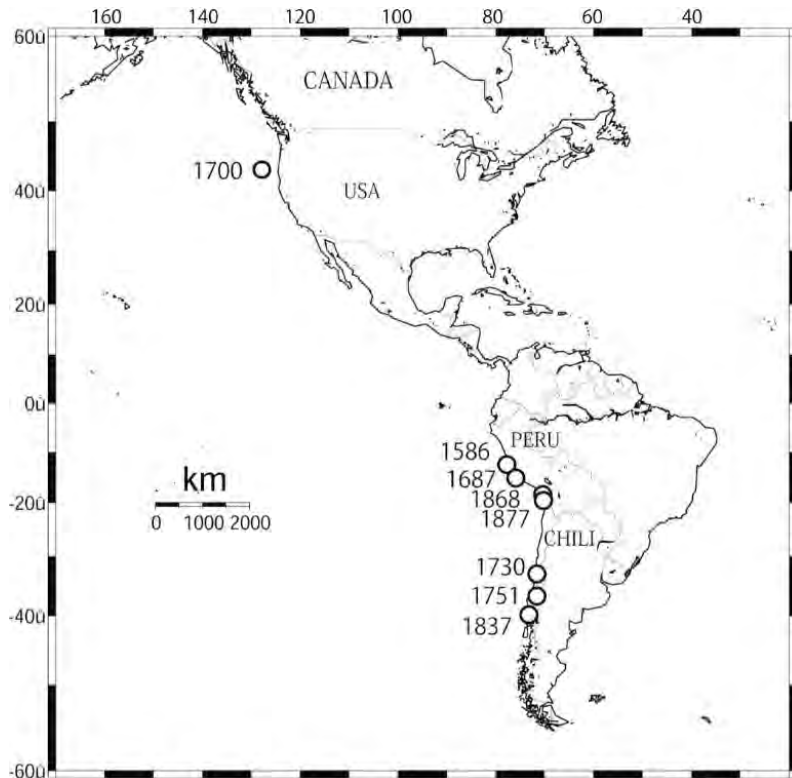


図4 日本で遠地津波が記録された、南北米大陸西海岸で発生した地震の震源位置

よびチリ国の西海岸で発生した地震が、日本に遠地津波をもたらしている。地球儀の上で検してみると、ペルー・チリの約4,000kmの南北に延びる直線状の海岸から直角方向大圏コースの延長上に日本列島が位置することがわかる。津波エネルギーはこの方向に集中して進行することが三好（1984）によって、解析的に示されている。

チリ津波、および近世に起きた8回の遠地津波の記録を見ても、南米大陸西海岸に発生した地震による遠地津波によって、日本列島で浸水高さ4mと超える津波となって現れることは、それほど珍しくないのである。以上のことから、宍喰をおそった永正九年(1512)の津波は、南米西海岸で起きた地震による遠地津波である可能性が高いと推察されるのである。

8. 西暦1512年ころの南米西海岸の地震津波伝承

それでは、西暦1512年前後の時期に、南米西海岸で起きた大きな地震津波の記録は存在するであろうか？ 西暦1512年といえば、Columbusが米大陸を発見してからまだわずか20年しか経過していない。Balboaがパナマ地峡を横断して、西欧人として初めて太平洋に達したのは永正九年（1512）宍喰津波の翌年の1513年である。この年まで西欧人には、太平洋は知られていなかったのである。ましてや、ペルーやチリの海岸に、西欧人の居住する都市が築かれ始め、ここで西欧人の手によって地震や津波の記録がなされ始めるのは、1562年のチリのConcepcionの地震津波からであって、これ以前にはペルー・チリにおける信頼の置ける西欧人による地震津波記録は存在しない（Solovievら1975）。

しかし、Soloviev ら (1975) の東太平洋津波カタログには、次のようなペルーの原住民の伝承記録が、記載されている。英文のまま採録すると次のようになる。

1513/1515 According to ancient Indian chronicles, Peru has had severe earthquake in the past — severe enough to cause high mountains to collapse. Coastal inhabitants have reported that, during such earthquake the ocean level has shown marked fluctuation (Silgado, 1968).

訳文：1513 年から 1515 年のころ。昔の(ペルーの) 原住民 (Indian) の伝承によると、Peru では過去に激しい地震があった。その地震の激しさは高い山の崩壊を引き起こすほど強いものであった。海岸の住民たちは、そのような地震の間、海面が著しく上下した、と報告している (シルガド, 1968 年)。

解説：ここには、1968 年に刊行された Silgado による文献のなかに、1513 年から 1515 年のころ、山も崩れるほどの強い地震が起き、津波を伴っていたと、ペルーの原住民の伝承は伝えていと記されている。突喰の記録による津波来襲年の 1512 年とこの伝承にいう「1513 年から 1515 年のころ」とは、わずか 1 年のずれがあるが、ペルーの記録は原住民の口頭伝承であるということを考慮すれば、この伝承に言う「山を崩すほどの地震で津波を伴っていた」とは、突喰に大津波をもたらした地震に一致するものである、ということとは、ほぼ確実に認定しうるであろう。

9. 後記

ピサロ (Francisco Pizarro) がペルー国に存在したインカ帝国を武力で滅ぼしたのは 1533 年のことである。ペルーの原住民にとって、過去の歴史事象の記憶は、この大事件が起きた年を基準として、長い時間にわたって、比較的正確に記憶されたと推定される。巨大地震の発生年が 1513 年から 1515 年であるという年代の記憶にも「インカ帝国滅亡の約 20 年前」として記憶されたに違いないため、一定の信頼性を認めるべきであろう。

この伝承上の巨大地震が起きた正確な日付はどのようなのであろう？ 突喰に津波が来襲した、永正 9 年 8 月 4 日は、当時世界中で使われていたユリウス暦では 1512 年 9 月 13 日に相当する (グレゴリオ暦では同月 23 日)。遠地津波は、ペルーから日本列島到達まで、およそ 24 時間が経過する。さらに、日本の標準時 (UT+9h) とペルー (UT-5h) には 14 時間の時差がある。この 2 点を考慮すると、ペルーで大地震が起きた日付は、日本より 2 日早い、1512 年 9 月 11 日に発生したこととなろう。この地震事例は、ペルー国の年表上で、日付の正確なもっとも古い事例となるであろう。

「山が崩れるほどの地震」であれば、ペルー国の現地には、この地震による液状化、地殻上昇による海岸段丘、あるいは津波痕跡などの地質学的証拠が多数現在まで残存している可能性がある。

筆者はすでに 78 才となり、しかも研究費が公的には支援されない退職者であるため、筆者自身がペルー国の現地において、この調査を遂行する希望はほとんどない。誰か若い研究者が、ペルー国の研究者と手を携えてこの地震津波の研究を引き継いでくださることを切に願う次第である。

この研究は、2025 年 11 月 20 ~ 21 日に東京大学武田ホールで開催された、国際津波学会, (ASIA Tsunami Workshop 2025) で発表した。

参考文献

- 中央気象台・海洋気象台, 1976, 『日本の気象史料 1』, 原書房, pp404
- 羽鳥徳太郎, 1984, 津波による家屋破壊率, 地震研究所彙報, 59, 433-439
- 三好 寿, 1984, 『津波のはなし』, 新日本親書, pp334
- 武者金吉, 1941-a, 『増訂 大日本地震史料 第一巻』, 文部省震災予防評議会, pp945
- 武者金吉, 1941-b, 『増訂 大日本地震史料 第二巻』, 文部省震災予防評議会, pp754
- Soloviev, S.L., and Ch. N. Go, 1975, Catalogue

- of TSUNAMIS on the eastern Shore of the Pacific Ocean, (in Russian. The English text was published by S.O. Wiegen, Canada, 1983, pp285) .
- 東京大学地震研究所, 1983, 『新収 日本地震史料 第三巻 別巻』, pp590
- 東京大学地震研究所, 1987, 『新収 日本地震史料 第五巻別巻 5-2』, pp2528
- 都司嘉宣, 1981, 元禄地震津波（1703-XII-31）の下田以西の史料状況, 地震 2, 34,401-411
- 都司嘉宣, 2025-a, 日記史料にみる東海・南海地震の前兆現象, 月刊地球, 47, 2, 70-82
- 都司嘉宣, 2025-b, 歴史時代に日本列島に來襲した南米海岸地震による遠地津波, 津波工学研究報告, 42, 37-68
- 宇佐美竜夫, 1998, 「日本の歴史地震史料拾遺」, 大和探査技術, pp512
- 宇佐美竜夫, 石井 寿, 今村隆正, 武村雅之, 松浦律子, 2013, 『日本被害地震総覧 599-2012』, 東京大学出版会, pp694
- 渡辺偉夫, 1998, 『日本被害津波総覧 第2版』, 東京大学出版会, pp238